「東京」へ機運醸成、地方から

盛岡 元五輪選手ら意見交換

いわてスポーツコンベンション（県教委、県体協など主催）は7日、盛岡市のアイーナで開かれ、元五輪選手や現役のパラリンピック選手が地方から2020年東京五輪・パラリンピックの機運を盛り上げようと意見を交わした。

「地方発オリンピック・パラリンピックムーブメント」をテーマとしたシンポジウムは3人が討論。リオデジャネイロパラリンピック陸上男子400㍍リレーで銅メダルを獲得した芦田創選手は「練習が結果に跳ね返り、自分を好きになれる」とスポーツの魅力を語り「『何でこんなことができるんだ』という超人的なパフォーマンスを見せたい」と3年後に意欲を示した。

「オリンピック・パラリンピックに岩手が何をできるか」意見を交換する（左から）友添秀則教授、小椋久美子さん、芦田創選手

名実ともに復興五輪とするために、北京五輪バドミントン女子ダブルス5位の小椋久美子さんは「子どもたちがスポーツに親しむ機会を増やすことで復興や元気につながっていくのではないか」と提言した。

本県は何をできるか。早大スポーツ科学学術院の友添秀則教授は「若い岩手の高校生、学生がどれだけボランティアに参加するか。それが震災を乗り越えたかどうかのバロメーターになる」と被災地と五輪の関わりを説いた。

北京五輪陸上男子400㍍リレー銅メダルの朝原宣治さんは「夢を追い続けて」と題して講演。左足の疲労骨折から復帰してメダルを獲得した経験を交え「失敗から学んだ」競技人生を振り返った。朝原さんたちを超える銀メダルに輝いたリオ五輪組のチームワークの良さも詳述し、中高生ら約300人の聴衆も熱心に聞き入った。